

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平11-171202

(43)公開日 平成11年(1999)6月29日

(51)Int.Cl.⁶

B 6 5 D 30/10

識別記号

F I

B 6 5 D 30/10

E

審査請求 有 請求項の数2 FD (全3頁)

(21)出願番号 特願平9-363630

(71)出願人 00021/251

田中産業株式会社

大阪府豊中市庄内西町5丁目17番6号

(22)出願日 平成9年(1997)12月15日

(72)発明者 谷口 満範

大阪府豊中市刀根山1丁目10-34

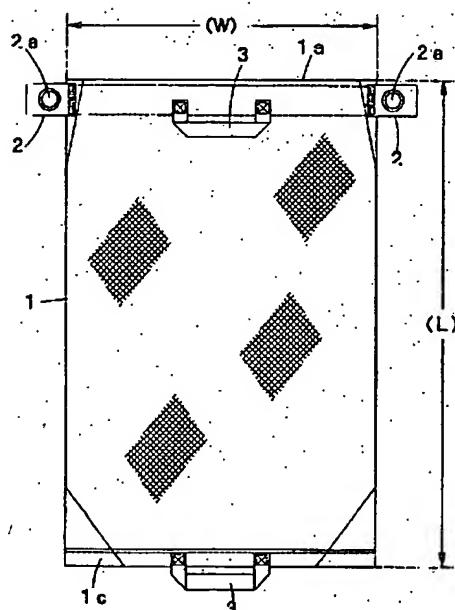
(74)代理人 弁理士 渡田 俊明

(54)【発明の名称】 小型コンバイン袋

(57)【要約】

【課題】 近年我が国では、一般農家の高令化が進み労働の主力が老人、婦女子に移行しつつあり、これら農業従事者にとって、一袋が30kgもの重量物を運搬、移動することは腕力的に、その限界を越えるものとなつた。然るに通常のコンバインは、掛止桿の間隔及び高さが規格に従つて製作されている関係上、袋主体の容量を減少させるに当たって、単に横巾を短縮しただけでは掛止桿を利用した袋主体の懸吊ができず、又袋主体の上記横巾をそのままにして縦長のみを短縮しても袋底が台板に届かず、いづれも使用時におけるコンバイン袋としての安定性を欠くという課題が生じるものであった。

【解決手段】 従来公知のコンバイン袋における袋主体の横巾を短縮する一方、その上縁部に横巾の短縮分に見合う長さのハトメ布を縫着し、各ハトメ布に両側の孔間隔が約1.0cmとなる係止具を貫設するという手段を用いた。



【特許請求の範囲】

【請求項1】袋主体の上縁開口部を開閉具によって開閉自在とし、その両側端部にハトメ孔などの係止具を設けてなるコンバイン袋において、従来の袋主体の横巾を短縮する一方、その上縁部に横巾の短縮分に見合う長さのハトメ布を縫着し、各ハトメ布に両側の孔間隔が約51.0cmとなる係止具を貫設したことを特徴とする小型コンバイン袋。

【請求項2】袋主体の上縁開口部又は下縁折り返し部の少なくとも一方の縁部中央に提げ手を縫着した請求項1記載の小型コンバイン袋。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】この発明は、農業用コンバインの排出ダクトに袋体の上縁開口を臨ませて、該ダクトから送出される粉粒を収納可能とした穀粒収納用の小型コンバイン袋に関する。

【0002】

【従来の技術】農業用コンバインは、穀粒等の排出ダクトの出口部に臨んで、コンバイン袋を交換自在に支持する掛止桿が設けられているが、その掛止桿間隔は通常38.0cm前後に規格化され、設定されているものであった。

【0003】これに対して上記コンバインに使用される従来の穀粒収納袋、即ちコンバイン袋は図3に例示したように、その袋主体(イ)が合成樹脂などのヤーンまたはモノフィラメントから織成或いは編成された生地によって縫製され、横巾(w)約58.0cm、縦長(l)が約80.0cmの方形状で、上縁部にファスナー等によって開閉自在とした開口部(ロ)を有する他、上縁部の両端に縫着される補強布(ハ)等を介してハトメ等の係止孔(ニ)を貫設し、そのハトメ間隔はコンバインの排出ダクトの挿入余裕を取って上記掛止桿よりも大きく50cm内外としたもので、生穀を収納した場合の実袋の重量が約30kgにも及ぶものであった。

【0004】尚、図中(ホ)(ヘ)は必要に応じて袋主体(イ)の上縁部又は下縁部の中央に縫着された提げ手を示す。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】近年我が国では、一般農家の高令化が進み労働の主力が老人、婦女子に移行しつつあり、これら農業従事者にとって、一袋が30kgもの重量物を運搬、移動することは腕力的に、その限界を越えるものとなった。ところでコンバインは上述したように、その掛止桿の間隔及び高さが規格に従って製作されている関係上、袋主体の容量を減少させるに当たって、単に横巾を短縮しただけでは掛止桿を利用した袋主体の懸吊ができず、又袋主体の上記横巾をそのままにして縦長のみを短縮しても袋底が台板に届かず、いづれも使用時におけるコンバイン袋としての安定性を欠くとい

う課題が生じるものであった。

【0006】

【課題を解決するための手段】そこで本発明は、従来のコンバイン袋における叙述の課題を克服することを目的として、下述する通りの具体的手段を講じたのである。

【0007】即ち、袋主体の上縁開口部を開閉具によって開閉自在とし、その両側端にハトメ孔などの係止部材を設けてなるコンバイン袋において、従来の袋主体の横巾を短縮して、その短縮量に見合う長さのハトメ布を上縁部の両側に突出して縫着し、各ハトメ布にハトメ等の係止孔を貫設して両係止孔間隔が大略51.0cmとなるように構成したものである。

【0008】又、上記コンバイン袋の上縁部又は下縁部の少なくとも一方の縁部中央に提げ手を縫着するという手段も採用した。

【0009】

【発明の実施の形態】以下、本発明の構成を図1～2に示す実施の形態に基づいて更に詳しく説明すると、図1において、1は袋主体、2は上縁部1aの両側に突出して縫着されたハトメ布、又3は必要に応じて上縁部又は下縁部の中央に設けられた提げ手である。

【0010】而して、上記袋主体1は、通常植物性、合成樹脂繊維等の紡糸で織成されたクロス織布又は合成樹脂のモノフィラメント等で編成したメッシュ地によって縫製される横巾46.0cm、縦長72.0cmの方形で、大凡20kgの生穀が収納可能な内容量を有するものとし、その上縁開口部をファスナー等の開閉具1bによって開閉自在とする他、該上縁部1aの両側にハトメ布2を突出状に縫着し、各ハトメ布にハトメ等の係止孔2aを開設することで、双方の係止孔2a・2aの中心距離がコンバインのダクトの粉粒排出口(図示せず)に臨んで付される掛止桿間隔(通常38.0cm)よりも長い50.0cm内外になるように設定したものである。

【0011】又、上記袋主体の縦横(L)・(W)の寸法は、生穀収納時の重量が約20kgになる内容積であるから、これを目安にした多少の寸法変更は自由であるが、少なくとも縦長(L)を更に短縮すると、袋主体1をコンバインの掛止桿に懸吊した場合に袋底が台板等に届かず、宙吊り状態になって使用時の安定性に欠けるので好ましくない。更に図1・2では、袋主体1の上縁部1aの表裏布及び下縁折り返し部1cの中央部には提げ手3をそれぞれ縫着したものを示したが、この提げ手3は上縁部又は下縁折り返し部のどちらか一方のみに設けることも亦自由であるし、更に上記提げ手3については、図示する縫着形態(方向)に限らず、袋主体の上、下縁部1a・1c共に、その取付方向が上下の向きを変更して縫着することは随意である。

【0012】

【発明の効果】以上詳述した通り、本発明に係る小型コ

ンバイン袋によれば、生糞等の収納時の実袋重量が20kg前後に収まり、腕力のない老人、婦女子でも容易に実袋の運搬、移動などが行え、従来の農作業における最大の隘路が解決されるという格別の効果が得られる他、該袋主体はハトメ布の延成により、袋主体を既製のコンバインの掛止桿に係着、支持させることができあり、農村の高令化対策の一環として、従来のコンバイン袋には期待できなかった顕著な利点が齎らざるものである。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明に係る小型コンバイン袋の正面図。

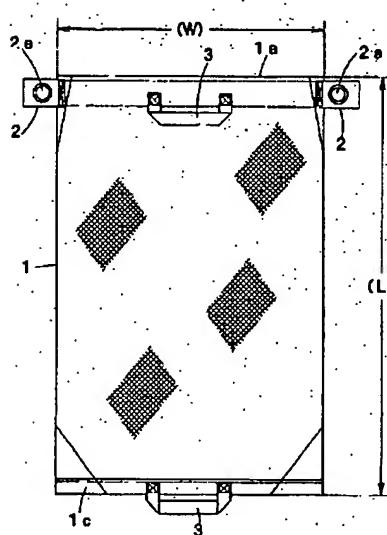
【図2】同上小型コンバイン袋の平面図。

【図3】従来のコンバイン袋の一例を示す斜視図。

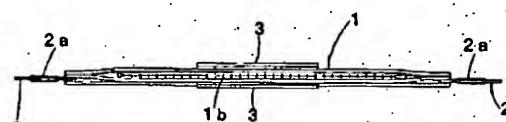
【符号の説明】

1	袋主体
1 a	上縁部
1 b	開閉具
1 c	下縁折り返し部
2	ハトメ布
2 a	係止孔
3	提げ手

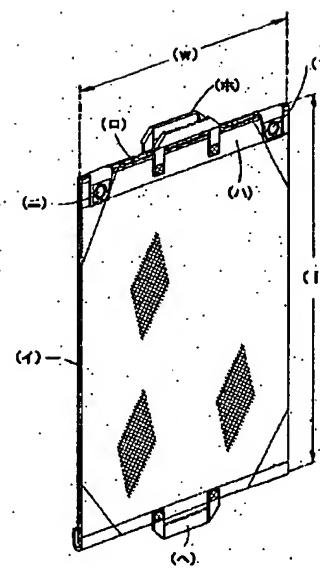
【図1】



【図2】



【図3】



THIS PAGE BLANK (USPTO)